

本文草稿

タイトル	骨移植の診断および骨移植時インプラント埋入の予後
作成者	庄司 憲明
作成日	平成19年3月22日

I. はじめに

骨移植された母床へのインプラント埋入時期ならびにインプラント埋入後の経時変化について画像診断学的に指標となるエビデンスの有無を検討した。

II. 方法および結果

1. 方法

MEDLINE (Pubmed&OVID)、SYSTEMATIC REVIEW および医学中央雑誌の検索によりそれぞれ35件、2件および26件がヒットした。このうち14件を重要文献とした。

2. 結果

腸骨（皮質骨と海綿骨）のオンレイグラフト（吸収した歯槽部の上に移植塊をのせる）を行った症例において、術後6ヶ月までに移植骨の皮質骨の厚みおよびdensity が減少した。しかし、海綿骨のdensity に変化はなく、グラフトの高さが25%減少した。その後の6ヶ月では移植骨の海綿骨部分のdensity が上昇した(文献1)。術後（上顎洞底挙上術とインプラント即時埋入）1年間で、全体の約4分1の症例において、上顎洞底がインプラントの先端と同レベルか、下（上顎洞内に突出）であった(文献9)。上顎洞底挙上術とインプラント即時埋入（一回法：グループA）と術後（二回法：グループB）の5年生存率に有意差はなかった(文献10)。上記報告のインプラント埋入の条件は様々であり、症例数も少ないことからエビデンスレベルを判定できない。

III. まとめとお勧め

多くの文献に共通する結果は、移植骨は吸収するということである。その吸収量については移植術、補填材料および部位などによりばらつきがみられた。今回の論文検索において骨移植された母床およびそこにインプラント埋入されたときの予後の画像診断学的検討は十分でなく、参考程度である。よって現時点で、上記 clinical question の答になる十分なエビデンスは無いと言える。